

[9]

氏名	蘇 浩 ^{そ こう}
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第50号
学位授与の日付	2019年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	近代東アジアの書学と文人交流 －山本竟山（1863－1934）の事例を中心に－
論文審査委員	主査教授 陶 徳民 副査教授 吾妻 重二 副査教授 二階堂 善弘

論文内容の要旨

碑学書家山本竟山（1863－1934）の事例を中心に近代東アジアの書学と文人交流ネットワークの実態を検討する本論文は、序章と本論の三部七章より構成されているものである。

序章では、本論文の問題意識、研究目的、時代背景、先行研究、研究方法と論文構造について紹介し、とりわけ竟山の置かれた明治大正期の日中文化交流の環境、および西洋発の「美術」観念が支配する近代日本における書の位置付けの問題を取り上げた。

第Ⅰ部「竟山書学の源流」において、竟山と日中の両大家日下部鳴鶴・楊守敬との師承関係を検討した。

第一章「日本人の師・日下部鳴鶴」では、鳴鶴と竟山の師弟関係と文人交流の様子を主として両者の書簡や作品から考察した。師弟関係の成立は、楊守敬が来日した背景として、鳴鶴が「六朝書道」を主張した時期である。関東を拠点とする鳴鶴は、頻繁に旅に出たため、竟山と書簡での交流が多かった。清末民国初期、鳴鶴は度々大陸出張の竟山に名作優品の代理購買を依頼した結果、日中の文人交流ネットワークが結ばれ、竟山の見聞と視野もより一層広げられた。書風の面では、鳴鶴は六朝の書とくに北碑の線質を混合し、北碑の雰囲気を強調しながら、初唐の結構で書かれる作品を多く残した。竟山は直接北碑や拓本から臨模するチャンスを多く掴んだため、北碑の書風や書体を色濃く反映した。それにしても、楷書と隸書については、とくに隸意を帯びた素朴で力強い楷書体の形成において、鳴鶴が竟山に与えた影響は大きい。両者はともに六朝書法を伝播した。さらに、鳴鶴の人格と書法を慕う竟

山は鳴鶴歿後、その追悼会と遺墨展を自力で主催した。

第二章「中国人の師・楊守敬」においては、楊守敬の功績、竟山とのふれあい、竟山に与える影響という三節から、両者の師弟関係を考察した。まず、楊守敬が来日後に行った中国で亡失した古籍善本の蒐集と出版は、中国にとって、近代の文献学・書誌学研究の重要活動であり、日本にとっては、近現代の書道変革において圧倒的な意義を有している。楊守敬が将来した夥しい碑法帖及び書法論著は、竟山などの書家たちの探究心を大いに刺激した。次に、楊守敬は 1902 年竟山との初対面以降、中国での筆談のほか、文通を主要手段とした。楊守敬は、竟山と金石碑版や書作、拓本をめぐる評価と交流を通して、竟山の視野を一層広げ、とりわけ所蔵の『餘清齋帖』、『潘孺初臨坐位帖』と『潘孺初臨鄭文公碑』を竟山に譲った。一方、竟山は購買依頼と楊の収蔵品の買取りなどにより、経済的に困っている楊守敬を支えた。さらに、毛筆の選定、範書の贈与、人脈の紹介、および楊氏歿後の追悼会・遺墨展の開催なども、竟山に与えた楊の影響がいかに大きかったかを示していると言える。両者の師弟交流は、竟山の視野と視覚的な経験および文人交流ネットワークを大いに広げたため、これを二十世紀初期における日中両国の書芸交流の典型事例と見做すことができる。

第Ⅱ部「文人交流ネットワーク」では、ネットワークという視角から時代順に竟山と中国・朝鮮・日本の文人との交流を論じ、和漢法書展覧会における文人の営みを考察した。

第三章「中国・朝鮮文人との交流」において、まず明治後期の竟山と朝鮮の名士、安心田の交流を取り上げ、両者が竟山の故郷岐阜で結んだ文人ネットワークを新資料によって明らかにした。続いて、竟山の通算 7 回の中国遊学中に文墨界の巨匠、呉昌碩と実りに満ちた面会を 3 回行った事実について検証した。呉昌碩の紹介のもと、竟山は金石碑版・書画を蒐集して持ち帰り、関西ないし日本書道の振興と日中文化交流に尽力した。呉氏書画の購入と普及などを通じ、激動の時代に置かれる呉昌碩を支えたキーパーソンとなった。さらに、文通や筆談の資料を通じて、竟山は京都に寄寓する金石学の大家、羅振玉との書学交流を明らかにした。竟山と安心田、呉昌碩、羅振玉などの書画家・金石学家とのネットワークは、文墨趣味を伝えただけでなく、明治後期及び大正期の日中朝三国間の文化交流の重要な一面を示している。

第四章「日本文人との交流」では、まず長尾雨山との交友について、竟山の上海滞在中、雅会での営みを中心とするや書画作品を通して、両氏の書、学問、教養と厚誼について考察した。竟山と雨山の活動は、近代日本の文人たちに刺激を与えつつ、伝統文化の底力を示す役割を果たしたのである。また、現存する竟山と宗星石の往来書簡と『申報』の記事を通して、二人の交友関係の一面を考察した。竟山と宗星石の交友関係を解明することは、台湾勤務時代の竟山の書学をめぐる交流を理解する上で重要であるだけでなく、明治後期の文人書家のあり方を考える上でも一定の意義を有すると言える。さらに、竟山と富岡鉄斎・謙蔵の交遊に関連する書簡や書画作品を整理・解説し、協賛した雅会も視野に入れて考察を加えた。竟山と鉄斎父子の交遊は大正期京都の文人交流の貴重な一側面を示すものである。以上、竟山と長尾雨山、宗星石、富岡鉄斎・謙蔵父子との文人交流活動に関する解明は、明治

大正期の代表的な文人たちが書や学問と向き合う態度、および雅会と書芸を盛り上げるために尽力した様子を浮き彫りにした。

第五章「山本竟山と和漢法書展覧会」では、大正二（1913）年十二月四日に山本竟山が主催した京都の和漢法書展覧会および関連する文人ネットワークを、文化交渉学の観点から明らかにした。竟山によって出版された『和漢法書展覧会記念帖』を取り上げ、展示品を手掛かりに開催の経緯と経過を検討した。また、比田井天来、羅振玉、王国維、長尾雨山、磯野惟秋、犬養毅諸氏の往復書簡に基づき、文人ネットワークを考察した。和漢法書展覧会は、蘭亭会と共に同時代日本の書道界に多大な刺激を与え、日中交流ないし東アジアの文化交流の展開に重要な影響を与えた。

第Ⅲ部「竟山とその書学の位置付け」において、竟山の経歴と代表作に基づいて、碑学と帖学の成立と融合の実態、及び竟山とその書学の影響力を考察した。

第六章「碑学と帖学の成立と融合」では、碑学と帖学の受容、書から見る美意識、著書『竟山学古』という三つの方面から、竟山書学における碑学と帖学の成立と融合の有り方を検討した。竟山は、日下部鳴鶴と楊守敬に師事する前に、神谷簡齋と王鶴笙に師事したほか、貫名菘翁に私淑し、早期の学書において日中両国の書法、特に帖学を身につけたとが、その早期の書作が一点も現存しておらず、帖学派としての書作や書風の移り変わりを確認できない。のちに竟山は、中国へ7回赴き、蒐集・実技・研究にわたる広い範囲で収穫を得たのである。また、竟山の各書風の代表作を取り上げながら、「骨」と「筋」、「力」と「気」という視点で、受容された碑学の表現を考察した。さらに、『竟山学古』を精査し、「碑帖融合」という営みを再確認した。

第七章「竟山とその書学の影響力」においては、竟山の収蔵品、書道会への尽力、碑石揮毫と代書活動、書道教育と出版業績という四つの方面から、竟山とその書学の影響を考察した。竟山は日中両国で夥しい蒐集を行い、大正期の京都蘭亭会・和漢法書展覧会・赤壁会・寿蘇会・清朝書画会に積極的に所蔵品を出品した。また、自己の鑑識眼と書法を鍛え、政治家・書画家・文学者との交流を通じて広い人脈とネットワークを築いた。加えて、日中の有名な書家に師事し、日本国内でかなりの人望を獲得し、書道界へ大きな影響を与えた。竟山は大正・昭和にかけて書道会を発足させ、複数の書道会と展覧会の顧問や審査員（長）を担当した。また、竟山の書道界での位置付けと、近代の主要書道団体の成立、展開と変遷を検討した。明治後期から昭和前期にわたり、植民地台湾と日本、特に京都において揮毫や代書を頻繁に依頼されたことから、竟山とその碑学書法がとりわけ関西で支持・信頼され、書風も広く受け入れられていると言ってよい。さらに竟山は、熱心に書道教育と出版事業に携わっており、質も量も抜群で、書芸の真髄と妙所を伝えていた。以上のように収蔵、揮毫、審査、教育と出版などの多方面に活躍した竟山は、大正期と昭和初期の関西書道界に異彩を放っていた巨匠と評価しても決して過言ではないと言える。

結論において、上記の研究内容をまとめ、全体の結びとする。また、本論で検討した近代東アジアの書学の時代性と文人交流ネットワークなどの問題点を再確認する。そして、扱う

テーマの行方を踏まえ、今後の課題を提起する。さらに、山本竟山の書学年譜、近代の書社、書展、書道関連出版物、学校における書道教育、書家たちの書学交流活動などに関する六つの附表を作成し載せている。

論文審査結果の要旨

本論文は、論文提出者が2018年春関西大学で開催された展覧会「山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク」の準備作業の一環としての資料収集に精力的に参加し、山本家と山本書学の流れを汲んだ泰山書道院、京都国立博物館の長尾雨山コレクション、鉄斎美術館および関西大学の内藤文庫・泊園文庫から集めた多数の一次史料を活用し、考証と解説の作業をへて書き上げた完成度の高いものである。また、文化交渉学の研究手法と日・中・朝三語の語学力をフルに生かした論文としても高く評価できる。しかし、竟山を結節点とする文人交流ネットワークと近代東アジアにおける多対多の書芸交流の環境と事象を相当解明したのに対し、書道の流派・技法および書学変遷史の見地から竟山自身の書の特徴と位置づけを具体的に描写し分析することはまだ十分にできていない。これは論文提出者の今後の研究課題と努力すべき方向であろう。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。